

【試論:その2】

下表**D群**について、いくつかの観点から考察していきます。

表：関係用語の使われ方（2014年3月調査）

A 群	C 群	D 群
レジリエンス(復活力) レジリエンス(強靭性) レジリエンス(災害回復力) レジリエンス(対応能力) レジリエンス(逆境力) レジリエンス(復元力・回復力)	レジリエンス・エンジニアリング レジリエンス・トレーニング レジリエンス・ビルディング レジリエンス・マネジメント レジリエント・ガバナンス レジリエンス育成プログラム レジリエンス機能 レジリエンス計画 レジリエンス工学 レジリエンス診断 レジリエンス向上 レジリエンス構築 レジリエンス能力	レジリエンス外交 レジリエンス人材 レジリエンス住宅 レジリエントな建物 レジリエントな社会 レジリエントなシステム レジリエンス・エコノミー レジリエント・ダイナミズム レジリエンス・マイコン レジリエンス収納 レジリエンス商品 キャリア・レジリエンス トレード・レジリエンス レジリエンスの未来 屋外のレジリエンス 小学生のレジリエンス 食習慣とレジリエンス
B 群 ナショナル・レジリエンス システムズ・レジリエンス インフラ・レジリエンス エネルギー・レジリエンス 経済(の)レジリエンス 地域(の)レジリエンス 家庭(の)レジリエンス 個人(の)レジリエンス 産業(の)レジリエンス 組織(の)レジリエンス 防災(の)レジリエンス 災害(の)レジリエンス		

D群に分類される関連用語は、**B群**の用語を具体的に、細分化した用語と考えることが出来ます。

例えば、世界経済フォーラムで、マクロシステムとしての「国」のサブシステムを「経済」、「環境」、「ガバナンス」、「インフラ」と「社会」に細分化していることを参考にすると「ナショナル・レジリエンス」のレジリエンスの基本要素として、「レジリエンス外交」、「レジリエンスな社会」、「レジリエンスなシステム」や「レジリエンス・エコノミー」を関連づけることが出来ると考えます。また、「個人(の)レジリエンス」は、「レジリエンス人材」、「キャリア・レジリエンス」、「小学生のレジリエンス」や「食習慣とレジリエンス」に関連付けすることが出来ます。

D群に分類される関連用語を更に、以下の様にいくつかの観点で、レジリエンスの評価の指標について考察してみます。

1. 静的なレジリエンスと動的レジリエンス

平常時に困難な課題や問題に意欲的に取組む気持ちや体制を整える静的なレジリエンス(準備)と災害や事故が起きた際、ビジネス、研究、競技や試験等での失敗といった目標を達成できなかった際の

気持ちの動きや行動といった動的なレジリエンス(対応)で**D群**の用語について、評価の指標を考えます。

例えば、「レジリエンス外交」では、国家としての外交の基本指針の明確化、情報収集能力と分析能力、交渉能力や組織としての意思決定のスピードが、静的なレジリエンスの評価の指標を考える上での切り口になると考えます。一方で、「レジリエンス外交」の動的なレジリエンスの観点では、望まぬ方向へと事態が推移していることに対する、トップマネジメントの基本方針、状況収集能力と分析能力、折衝力等が評価の指標の切り口になると考えます。

静的なレジリエンスと動的なレジリエンスの観点では、静から動への移行期も評価の指標の重要な切り口になると考えます。

2. 構成要素とシステム

組織やシステムを構成する要素に着目した要素のレジリエンスとシステムのレジリエンスの観点で**D群**の用語について、評価の指標を考えます。

例えば、**D群**の用語の中では、要素のレジリエンスとしては「レジリエンス・マイコン」が、システムのレジリエンスとしては、「レジリエントなシステム」、「レジリエントな社会」や「レジリエンス・エコノミー」が挙げられます。

そもそも、レジリエンスは、システム(組織(企業、プロジェクト、自治体、集団や地域))を対象としていられると考えられます。ここで、構成要素の視点を取り入れているのは、システムを考える上では、要素とシステムとの関連を明確にしておくことが必要と考えたからです。システムは個々の構成要素により機能を実現する一方で、システムは構成要素の特徴を補うこと(フェイルセーフ、フルプルーフ、フォールトトレラントや冗長性)で、そのレジリエンスを実現しています。その点で、評価の指標には、構成要素とシステムの両方からの観点での検討が必要と考えます。

3. ハードウェアとソフトウェア

レジリエンスを実現するためのハードウェア(HW)とソフトウェア(SW)の観点で**D群**の用語について、評価の指標を考えます。

例えば、「レジリエントな社会」を対象にすると、社会を構成するHWと社会を動かす仕組み(SW)の組合せで社会が創られていることが、評価の指標を考える上での切り口になると考えます。

4. レジリエンスの実現とその過程

「2.構成要素とシステム」でも「3.ハードウェアとソフトウェア」でも、システムの構成要素としての人材の観点では、述べてきませんでしたが、レジリエンスの評価の指標を考える上で人材は、非常に重要であると考えます。

例えば、人材育成でのレジリエンスの実現では、「キャリア・レジリエンス」や「レジリエンス人材」に対して、ポジティブ心理学からのアプローチが取られています。レジリエンスの実現に向けた取組み、特に、レジリエンスな人材の育成は、評価の指標として必要な切り口であると考えます。

5. 最後に

評価の指標について、以上のようにいくつかの観点から述べてきました。ここで示したそれぞれの観点での指標の切り口はその一部であり、さらに議論を深めて、広げていくことが必要であると考えています。

また、指標としては、一般的に客観性が重要になりますが、加えて、レジリエンスの指標としては、BCMSでのPDCAによる改善活動を考え上では、指標それぞれに対する成熟度を定義し、例えば、「レ

「レジリエンス成熟度モデル」といったもの創り出すことが必要であると考えます。

レジリエンス協会としては、会員の方々の持つ高い専門性の提供を受けて、個別の分野での具体的な指標の作成と成熟度モデルの構築を進めていきたいと考えます。

(文責:黄野吉博・室橋雅彦、2014年7月22日)